

幼児期における子どもの気になる行動について

—保育者と保護者の認識の差異—

佐野 富有子・山口 一

キーワード：気になる行動 保育者 保護者

抄録：幼稚園、保育園において、いわゆる「気になる」行動をすると捉えられている子どもたちが生活している。本研究では、保育者・保護者のそれぞれに4～5歳児の「気になる行動」について調査を行うことで、気になる行動の種類やその頻度を把握し、保育者と保護者の認識の違いを明らかにした。対象者は、首都圏の3つの保育園と5つの幼稚園に勤務する保育者160名とA県のB幼稚園に通う年中児・年長児の保護者346名である。調査実施の同意が得られた保育者・保護者共に、子どもの気になる行動リストの気になると思われる行動に○をつけてもらった。因子分析の結果、質問項目は、「コミュニケーションの困難さ」「集団適応と情動抑制の困難さ」「対人不安と感情表出の困難さ」「消極性」「日常活動の困難さ」の5つの因子が抽出された。各下位尺度得点についてt検定を行ったところ、「コミュニケーションの困難さ」($t=-10.06, df=314, p<.001$)、「消極性」($t=-2.28, df=314, p<.05$)、「日常活動の困難さ」($t(276)=-2.27, p<.05$)は、保護者よりも保育者の方が有意に高い得点を示していた一方で、「対人不安と感情表出の困難さ」($t=4.62, df=314, p<.001$)は、保育者よりも保護者の方が有意に高い得点を示していた。保育者は、発達に関する知識を持ち、子どもと適度に距離を保ちつつ、子どもの育ちを集団の中の個人として捉えているため、専門的な視点から発達に問題があると思われる行動や集団の中で目を引く行動について気になるとする回答が多かった反面、保護者は、周囲にアドバイザーも少なく、情緒的な問題や他者に迷惑をかける行為に対して、自身の悩みや焦りに直結させて、気になるとする回答が多かったと考えられた。このような保護者に対し、日常的に子どもと接している保育者が、子育てについて共に考え、より良い方向へ導いてくれるようなアドバイザーの役割を担っていく必要があるだろう。

1. 背景

1. 問題提起

幼稚園、保育園において保育者または周囲の人々から、いわゆる「気になる行動」をする子どもたちが生活している。本郷(2006)は、「気になる行動」として「落ち着きがない」「感情をうまくコントロールできない」「他児とトラブルが多い」を挙げ、こうした行動をとる子どもを「気になる子」としている。さらに、「気になる幼児は一般に顕著な知的の遅れはなく、

子どもによっては平均以上の知能を示すこともあるため、乳幼児健診などでは十分に気づかれないことがある」と述べている（本郷, 2005）。つまり、いわゆる気になる行動をする子どもは、発達障害等の特徴があるにもかかわらず、明瞭に精神障害や知的障害と診断されず、あるいは当面診断が不明であるなどの理由で、周囲の理解が得られにくく、その理解困難な行動から他者からの評価を低くしている可能性がある。

また保育現場において、周囲の保育者、養育者が気になる行動をする子どもたちとの関わりに困難を感じ、その子どもたちとの交流の中でしばしば自信をなくし、自分を責め、同時に逃げ出したいという気持ちに陥り、気になる行動がさらに理解困難なものになる、というような悪循環を招いている可能性についても考慮すべきだろう。こうした事実は、保育者・保護者両者にとって重要な課題であり、真正面から取り組んでいかなければならないことだと考えるのである。

このように、「気になる」とされる子どもの理解と支援のあり方についての関心が高まっているが、「気になる」子どもたちの理解困難な行動を評価するための尺度として、信頼性ならびに妥当性を十分に備えたものはこれまで見当たらない。

子どもの気になる行動を評価する尺度としては、本郷（2005）の「気になる子どもの行動チェックリスト」が開発されているが、61項目（自由回答1問含む）と項目数が多いこと、さらに発達障害が疑われるような項目がほとんどであることから、さらなる検討が必要であると考えられる。また、幼児の問題行動に関する因子構造モデルの検討を試みている矢嶋ら（2000）の研究や、中田ら（1999）の「幼児の行動チェックリスト（CBCL/2-3）日本語版」を検討している研究があるが、いずれの研究も発達障害児のスクリーニングを目的としているため、項目によっては子どもの気になる行動の把握にはそぐわないものもあると考えられる。このように今までの子どもの気になる行動については発達障害を考えての尺度しか存在しないのが現状であり、もう一度保育者・保護者に「気になる行動」を尋ねて「気になる行動」を再検討する必要があると思われる。

また、保育者にとっての「気になる」行動は、一概に母親の子どもに対する評価と一致しないことも少なからず起こることである。武井ら（2010）は「母親の方が専門家よりも子どもの社会性を高く評価する」と指摘していることからわかるように、幼稚園・保育園において保育者たちが「気になる」とする子どもたちは、家庭の場においては「良い子」であることも多く、結果として保育者と母親との認識のズレから関係悪化につながることも少なくないのである。また、家庭という閉鎖的な環境では母親が子育てに関する悩みを一人で抱えることも多く、このような、誰かに頼ることもできない母親が抱える悩みに対して、幼稚園・保育園側からアプローチしていくことの必要性を感じるのである。そこで本研究においては、保護者に対しても保育者と同様の質問をすることで、保育者と保護者の気になる行動に対する認識の違いを明らかにしたい。

なお、同じ幼稚園児、保育園児といっても年齢によって様子はかなり異なる。3～4歳（年少児）の子どもたちは日常的に多動、衝動的であり、気になる子の判別は困難であることが考

えられる。大隅(1989)は年長になるにつれ、外界についての知識が増加し、子どもは自分が求めるものは何かを知りようになり、知覚はより速く、正確になる、と述べている。さらに5歳～7歳の間に注意の質的変化が起き、5歳以下の子どもの注意は1つのことに集中し続けることが困難でそらされやすいとも述べている。

よって、本研究においては幼児期における4～5歳児(年中児、年長児)に対しての気になる行動に焦点を当て考察することとする。

2. 「気になる子」の「気になる」行動について

実は、幼稚園・保育園において子どもの「気になる」行動は頻繁に見られ、近年増加していると言われている。この増加する「気になる」行動をする子を「気になる子」として捉え、理解しようとする動きが盛んになっている。厚生労働省は、「気になる子」という文言について、平成20年厚生労働省の障害児支援の見直しに関する検討会において、当初障害の診断がまだその時点で確定していない子どもや、比較的障害の程度が軽度であること、親が障害を受容できていない状況も含めて、「グレーゾーン」という言葉を使用していた。しかし、「グレー」という言葉も適切ではないという議論により、障害児支援の見直しに関する検討会・報告書において、「気になる子」という言葉を用いることで、気になる段階からの支援の必要性について言及するようになった。これに合わせ、平成21年文部科学省では、「特別支援教育の推進に関する調査研究協力者会議」の審議の中間とりまとめとして「特別支援教育の更なる充実に向けて～早期からの教育支援の在り方について～」を発表し、その中で、「例えば発達障害等があることが想定されても、障害があると明確には判断できない場合や、障害があるが保護者がそれに気づき適切に対応できにくい場合など、『気になる』、『子育てに対して不安である』という段階から、その子どもだけに限らず、その保護者に対しても支援を行う必要がある」と、気になる子への早期対応の必要性や気になる子を取り巻く保護者支援について言及するようになった。このように「気になる子」という言葉は社会のニーズとともに広まっていったのである。

また、藤永(2009)は、「この10年で最も変わってきたと思うのは、障害児や子どもの神経症、頑固な指しゃぶり・おねしょのような精神衛生問題等のどのカテゴリーにも入らないような子どもの出現である」と述べている。そして「これらはすぐに目立つほどではなく問題はごく微小に見えるが、長く観察していると気になる特徴がいろいろと現れている「気になる子」として、認識されてきた結果であろう」と推測している。本郷ら(2003)は保育所における気になる子どもの行動特徴を明らかにするために調査を行い、141名の幼児についてその属性・特徴を報告している。その中では(1)性別では男児が多いこと(117名、83%)、(2)各年齢に存在すること、(3)ほとんどが複数年の保育を経験していること、(4)82.3%の子どもは相談機関を利用していないことが示された。また、気になる子どもの行動特徴は大きく「対人的トラブル」「落ち着きのなさ」「状況への順応性の低さ」「ルール違反」に分けられることが示されている。「対人的トラブル」の因子は「自分の行った行動を認めようとせず、言い訳をする」「他児の行為に対して怒る」「『バカヤロー』などの言葉を言う」などの項目からなり、ここでは年

年齢が上がるにつれ、次第に子ども間のトラブルが増していく様子がわかっている。しかし本郷ら（2003）は、これは単に気になる子ども自身の特徴の変化というよりも周りの子どもとの関係や他児の自己主張の強さと関連して生起する問題であると捉えている。このことは、年齢が上がるにつれ、周囲の子どもが比較的落ち着いてくる中で「気になる子」の特徴がより顕著なものとして保育者に認識されやすくなるということが考えられる。また、「きょろきょろする」「他のことが気になって保育者の話を最後まで聞けない」「『待ってて』などの指示に従えない」などから構成される「落ち着きのなさ」の因子の結果や、「日によって調子の良い時と悪い時の波が大きい」「集団場面より1対1場面の方が落ち着いていられる」「一度主張し始めるとなかなか自分の考えを変えない」などからなる「状況への順応性の低さ」の因子の結果から、「落ち着きのなさ」や「状況への順応性の低さ」については、保育者は子どもの年齢にかかわらず比較的早期から気になっていることが示されている。本郷（2009）はこの2つの因子は、比較的早期に出会う環境の影響や子どもの器質的特徴に関連していると述べている。さらに、「順番を守らないで、横から入り込もうとする」「あそびのルールを破って自分勝手にふるまう」などの項目からなる「ルール違反」の因子について、保育者は比較的早期から気になっているが、6歳になると一層「気になる」程度が増すと述べている。これは、就学を控えた6歳頃になると、ルール遊びがより多く導入されるようになり、「ルール違反」が一層目立つようになってくると考えられる。これらの結果から、本郷ら（2003）は、「気になる幼児の行動特徴には、気になる幼児自身の器質的特徴に由来されるものだけでなく、他児の発達や導入される遊びの種類に依存して生起するものなど様々なものがあると考えられる」と述べている。ゆえに気になる子どもの行動特徴を理解するには、1側面だけでなく、さまざまな側面から捉えることが重要であるということが示唆されている。そこで本郷（2005）は「気になる子どもというのは、知的な発達には顕著な遅れは認められないにもかかわらず、「落ち着きがない」「他児とのトラブルが多い」「自分の感情をうまくコントロールできない」などの特徴をもつ子ども」という定義づけをしている。

しかし、このような行動を示す子どもだけが「気になる」として定義づけすることは適切なのであろうか。藤井ら（2010）の研究において、保育者が気になると感じている子どもがどのような特徴を示しているのかを自由記述から検討を試みている。その結果、自閉スペクトラム症・注意欠陥多動症・知的能力障害が疑われる子どもたちのグループと、障害があるとは特定できないが、一人遊びが多く、集団に参加できない子どものグループが存在することが示された。しかしながら、本研究の初期段階における、勤続年数10年以上の現役幼稚園教諭数名への聞き取り調査によると、「落ち着きがない」「他児とのトラブルが多い」、等の衝動性よりも多く挙げられた行動特徴として、「嘘をつく」、「人の顔色を伺う」、「心配性である」という項目であった。これらの項目は、自信がない、自発性がない、という特徴を持った子どもたち、あるいは誤ったコミュニケーションが学習されている子どもたちがいるということが示唆されている。このことを踏まえ、気になる子どもの特徴についてさらに検討事項を加える必要があるのではないかと考える。

平澤ら(2005)の保育者に対する調査研究では、保育者は「気になる・困っている」行動にあてはまる子どもの中で、「診断なし」が選択された子どもは75.8%で、「診断あり」が選択された子どもは24.2%と診断のなされていない子どものほうが多い、という結果となった。この結果について平澤らは、『集団活動に関する問題』に関して、特に診断のない子どもでは、家族との話し合いがすべて行われるわけではなく、また保育所・園として専門的な支援を受けていないという違いが見られ、それが対応の困難性につながっている可能性がある」と考察している。これらのことから、明らかに精神障害や知的障害を持たない子への理解を深めることが気になる子を理解する上で、重要であると考えられるようになった。

このように、今までは、発達障害が疑われる行動特徴が「気になる」行動として捉えられることが多かったが、現在ではそれ以外の行動も保育者にとって「気になる」行動として捉えられていると考えられる。ゆえに、子どもの根本を広い視点から理解するためには、子どもを「気になる子」として捉えるのではなく、子どもの「気になる行動」として捉える必要があると考える。

そこで、本研究においては、今まで考えられてきたような「気になる」行動を見直し、「衝動性」、「集団生活の困難さ」、その他の発達障害が疑われる行動以外の群も含め、実際にどのような行動が「気になる」行動なのかを再考したいと考える。そのため、本研究においては、「嘘をつく」、「人の顔色を窺う」、「心配性である」等の項目の、「対人関係面の不安」、「不適切な感情表出」のタイプを付け加えた保育者へ様々な領域の「気になる行動」を入れた質問紙を作成して実施することで、現在の保育の場における気になる行動の種類やその割合を把握したいと考える。一方で、保護者にもアンケートを実施し、保護者にとってどのような子どもの行動が「気になる」と感じているのかを把握し、保育者と保護者の認識の違いを明らかにしたい。

II. 目的

保育者と保護者に一般的に子どもの示す「気になる行動」を、さらに保護者には、自身の子どもの「気になる行動」についての質問を行い、現在の保育の現場における気になる行動の種類や保育者と保護者が気になるとする割合を把握することを目的とする。その結果から、保育者と保護者の「気になる行動」の差異を明らかにする。それにより、今後、保育の現場から保護者のニーズに沿った子育て支援を模索していくこととする。

III. 対象と方法

本研究は、桜美林大学研究倫理委員会の承認を得て行った。(2012年3月受理 No. 11038)

1. 調査対象

保育者に対する調査は首都圏の3つの保育園と5つの幼稚園に勤務する保育者を対象とした。対象者は計144名(男性9名・女性135名)であった。

一方、保護者に対する調査は首都圏にあるA県のB私立幼稚園に通う4～5歳児(年中児・

年長児)の保護者を対象とし、保育者と同様のアンケートを行った。

2. 調査時期

2012年3月～2012年10月

3. 調査用紙

<保育者が感じる子どもの気になる行動リスト>

本郷(2005)の「気になる子どもの行動チェックリスト」、中田ら(1999)の「幼児の行動チェックリスト(CBCL/2-3)日本語版」、矢嶋ら(2000)の「幼児の問題行動に関する因子構造モデル」、首藤(1995)の「幼児の自己主張-自己抑制に関する質問紙」等を参考に、さらにベテランの保育者からの意見をふまえ、気になる行動には、『衝動性・攻撃性』『集団活動の困難さ』『発達の遅れ』『日常活動の困難さ』『不適切な感情表出』『不安』の要因があると考え、それぞれの要因に関して子どもの気になる行動特性を問う質問項目をまとめた。

『衝動性・攻撃性』は「他児に対し、すぐに手が出る(たたく、ひっかく等)」「他児の制作物を壊したり遊びを妨害したりする」等の8問、『集団活動の困難さ』は「集団活動になかなか入れない」「促されてもあそびをやめられない」等の8問、『発達の遅れ』は「語彙が少ない、一語文でしか話さない」「会話はオウム返しが多い」等の8問、『日常活動の困難さ』は「おもらしをよくする」「着替えができない」等の8問、『不適切な感情表出』は「嘘をつくことが多い」「いけないとわかっていることをわざと繰り返す」等の10問、『不安』は「心配性である」「親と別になると気が動転する」等の9問とし、計51項目からなる質問紙を作成した。

回答は、気になる行動だと思う項目の番号に、最大20問まで○をつけてもらう方法をとった。

<保護者が感じる子どもの気になる行動リストと子育ての悩みと楽しさの自由記載>

保育場面における気になる行動と、家庭で感じる気になる行動を比較するために、保育者に対して使用した「子どもの気になる行動リスト」から保護者にも使用可能な45項目を挙げ、一般に子どもの気になる行動とはどのようなものか、を質問した(最大20問までチェック)。次に同じ調査用紙で自身の子どもについての気になる行動をいくつでもチェックしてもらった。

さらに、「子育ての悩みはどのようなことですか?」という子育ての悩みに関する自由回答と、「子育ての楽しさはどのようなことですか?」という子育ての楽しさに関する自由回答を設け、それぞれ自由に記載してもらった。

4. 調査方法

アンケート調査実施の同意が得られた幼稚園・保育園の園長(もしくは担当者)に対し、調査の趣旨と倫理的配慮の説明、質問紙の配布を行った。その後、園長(もしくは担当者)から在籍しているすべての保育者へ質問紙を配布してもらい、保育の空き時間に回答をお願いした。回収は翌週までに郵送していただいた。

一方、保護者に対する調査は、園長から調査の同意を得たB幼稚園に、調査の趣旨と倫理的配慮の説明、調査用紙、調査に関する詳細を記述した手紙を配布した。その後、4、5歳児(年中児年長児)を担当する保育者からそれぞれのクラスに在籍している保護者に、密封用の

封筒と共に前述の各用紙を配布してもらった。調査に同意をした保護者からの回答は、B幼稚園に密封して提出してもらい、その後調査実施者が受け取りにいくという形をとった。

分析は、保育者・保護者へのアンケート共に、「ある：0点」、「ない：1点」として集計した。その後、統計処理ソフト IBM SPSS Statistics20.0 を使用し、最尤法・Promax 回転を用いて探索的因子分析を行った。また、尺度の信頼性を検討するために、抽出された因子ごとに Cronbach の α 係数を算出した。保護者の悩みや楽しさの自由回答については、KJ 法により分類し、どのような回答の傾向があるのかを調査した。

IV. 結果

1. 調査対象と回答率

保育者に対する調査票は、全部で 160 名に配布された。そのうち回収されたものは、160 部であり、回収率は 100% であった。その中で、回答に不備のあったものを除いた 144 部を分析対象とした（有効回答率 90%）。回答者は勤続 1 年目から 50 年目までの保育者であった。そのうち幼稚園教諭は 82 名 (56.9%)、保育士は 62 名 (43.1%) であった。また有効回答数のうち、男性保育者は 9 名 (6.3%)、女性保育者は 135 名 (93.8%) であった。

一方保護者に対する調査票は、全部で 346 名に配布された。そのうち回収されたものは、182 部であり、回収率は 53% であった。その中で、回答に不備のあったものを除いた 172 部を分析対象とした（有効回答率 94.5%）。回答者は 23 歳から 50 歳までの保護者であった。有効回答数のうち、父親は 3 名 (1.7%)、母親は 169 名 (98.3%) であった。また、男児の保護者 91 名 (52.9%)、女児の保護者 81 名 (47.1%) であった。

2. 因子分析の結果 (Table 1)

保育者と保護者の回答を合わせた 316 名分の回答につき、保育者と保護者に共通した 45 項目に対して主成分法による因子分析を行った。固有値の変化は、4.715, 3.350, 2.792, 1.864, 1.697, 1.417, 1.254... というものであり、5 因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度 5 因子を仮定して主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった 7 項目を分析から除外し、再度主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。Promax 回転し項目分析をした後の最終的な因子パターンを Table1 に示す。なお、回転前の 5 因子で 38 項目の全分散を説明する割合は 39.4% であった。

第 1 因子は、11 項目で構成されており、「語彙が少ない、一語文でしか話さない」、「会話はオウム返しが多い」など、限定的な方法でコミュニケーションをとっている行動の項目が高い負荷量を示していた。そこで「コミュニケーションの困難さ」因子と命名した。

第 2 因子は 13 項目で構成されており、「嫌なことがあるとすぐに怒り出す（かんしゃくを起こす）」「促されてもあそびをやめられない（あそびを終えなければいけないとき等）」など、集団行動に適さない行動や、情動の抑制が困難である可能性が高い行動の項目が高い負荷量を示していた。そこで「集団適応と情動抑制の困難さ」因子と命名した。

第3因子は6項目で構成されており、「さびしそうにしていることが多い」、「嘘をつくことが多い」など、不安な気持ちによって感情の表出が困難になっている可能性が考えられる行動の項目が高い負荷量を示していた。そこで、「対人不安と感情表出の困難さ」因子と命名した。

第4因子は4項目で構成されており、「恥ずかしがりや、臆病である」、「心配性である」など、行動が制限され、主体的な行動がとれていない可能性が考えられる行動の項目が高い負荷量を示していた。そこで、「消極性」因子と命名した。

第5因子は4項目で構成されており、「トイレに自分でいけない」、「着替えができない」など、日常生活に必要な活動に困難が生じている可能性が考えられる行動の項目が高い負荷量を示していた。そこで、「日常活動の困難さ」因子と命名した。

3. 各因子の平均値、標準偏差、内的整合性、因子間相関 (Table 2)

子どもの気になる行動アンケートの5つの尺度の下位尺度に相当する項目の平均値と標準偏差を算出したところ、「コミュニケーションの困難さ」(平均 .31, *SD*.26), 「集団適応と情動抑制の困難さ」(平均 .34, *SD*.24), 「対人不安と感情表出の困難さ」(平均 .37, *SD*.28), 「消極性」(平均 .09, *SD*.18), 「日常活動の困難さ」(平均 .11, *SD*.20)であった。内的整合性を検討するために各下位尺度の α 係数を算出したところ、「コミュニケーションの困難さ」で $\alpha = .75$, 「集団適応と情動抑制の困難さ」で $\alpha = .75$, 「対人不安と感情表出の困難さ」で $\alpha = .61$, 「消極性」で $\alpha = .45$, 「日常活動の困難さ」で $\alpha = .57$, と「コミュニケーションの困難さ」「集団適応と情動抑制の困難さ」「対人不安と感情表出の困難さ」では十分な値が得られたが、「消極性」「日常活動の困難さ」では、低い値になった。このように内的な一貫性はやや欠けた結果となったが、内容的妥当性に関しては、先行研究の結果にも準拠した結果が出ており、実際に日常的に子どもと接しているベテランの保育者が指摘している項目が反映されていると考えられるため、保たれていると言えよう。

なお、気になる行動の下位尺度間相関に関しては、「対人不安と感情表出の困難さ」と「消極性」で有意な弱い負の相関を示した。

Table 1. 保育者・保護者による気になる行動アンケートの因子分析結果
(主成分法 Promax 回転後の因子パターン)

	I	II	III	IV	V	共通性	平均	SD
因子1 コミュニケーションの困難さ 寄与率 12.6%								
Q24. 語彙が少ない、一語文でしか話さない	.77	-.14	.03	-.06	.07	.57	.33	.47
Q19. 会話はオウム返しが多い	.71	-.18	.08	.05	.02	.51	.32	.47
Q41. 突然大声を出すなど奇妙な行動をする	.52	.15	.16	-.22	-.12	.36	.55	.50
Q43. 友達が怒っていることをうまく理解できない	.50	.11	-.11	.11	.04	.37	.30	.46
Q5. いつもと違う活動に慣れない (慣れるまで時間がかかる)	.47	-.03	-.25	.19	-.11	.34	.20	.40
Q11. しゃべり方に問題がある (どもる、ほとんどしゃべらない)	.41	.07	.04	-.07	.01	.26	.29	.45
Q29. 食べるのを拒否する	.41	-.08	.07	-.04	.20	.33	.16	.37
Q9. ぐにゃぐにゃして座ってられない	.38	.20	-.10	-.04	.08	.35	.40	.49
Q37. 大人としかコミュニケーションを取ろうとしない	.36	-.11	.19	.08	.15	.30	.04	.19
因子2 集団適応と情動抑制の困難さ 寄与率 9.0%								
Q22. 嫌なことがあるとすぐに怒り出す (かんしゃくを起こす)	.02	.55	.15	.04	-.10	.39	.42	.49
Q36. 他児に対してすぐ怒る	-.20	.53	.03	-.03	-.05	.29	.22	.42
Q34. 促されてもあそびをやめられない (あそびを終えなければいけないとき等)	.13	.51	-.32	.11	-.05	.43	.23	.42
Q44. 友達にちょっかいを出して怒らせることが多い	-.10	.50	-.11	.03	.03	.29	.24	.43
Q35. 他児に対し、すぐに手が出る (たたく、ひっかく等)	.07	.47	.11	-.27	.00	.32	.59	.49
Q4. いけないとわかっていることをわざと繰り返す	.02	.46	.19	.04	.01	.32	.43	.50
Q45. 友達のものや友達が使っているおもちゃがほしいとすぐにとる (欲しいと言えない)	-.02	.46	-.01	-.08	.15	.29	.26	.44
Q21. 遊びのルールを破って自分勝手に振舞う	.02	.46	-.02	-.02	.03	.28	.33	.47
Q17. 一度怒るとなかなかおさまらない (気持ちの切り替えが苦手)	.30	.39	.10	.05	-.21	.37	.41	.49
Q3. 「待って」など、の指示にしたがえない	-.06	.39	-.18	.11	.05	.28	.19	.39
Q26. 自分が行った行動を認めようとせず、言い訳をする	-.05	.37	.06	.04	.08	.29	.20	.40
Q12. じっと椅子に座ってられない	.18	.35	-.31	-.05	.03	.32	.39	.49
因子3 対人不安と感情表出の困難さ 寄与率 7.7%								
Q10. さびしそうにしていることが多い	-.01	-.02	.71	.16	.03	.38	.30	.46
Q18. 嘘をつくことが多い	.07	.15	.54	.00	.09	.34	.37	.48
Q42. 表情がない	.43	-.06	.47	-.06	-.09	.38	.55	.50
Q33. 人の顔色を伺う	.14	-.06	.46	.14	-.09	.26	.31	.46
Q14. もじもじして何か言いたそうにしているのに、黙ったままにいる (SOSが出せない、ありがとうと言えない、あいさつがきちんとできない、など)	-.02	.18	.40	.37	.03	.29	.24	.43
Q2. 「バカヤロー」など人が傷つく言葉を使う	-.25	.26	.34	-.18	.06	.33	.47	.50
因子4 消極性 寄与率 5.3%								
Q31. 心配性である	-.02	-.07	.10	.51	.00	.20	.05	.21
Q39. 恥ずかしがりや、臆病である	-.05	-.07	.08	.50	-.10	.23	.04	.19
Q13. ちょっと失敗したりうまくいかなかったりするとすぐにあきらめる	-.06	.22	.14	.43	.06	.24	.16	.37
Q25. 自分から仲間の中に入れない	.13	.12	.04	.40	.17	.29	.13	.34
因子5 日常活動の困難さ 寄与率 4.8%								
Q16. トイレに自分でいけない	.10	.01	.02	-.07	.69	.36	.11	.31
Q40. 着替えができない	.23	.04	-.11	.04	.45	.27	.08	.27
Q6. いつも手助けを求める	-.10	.06	.09	.19	.40	.30	.08	.27
Q8. おもらしをよくする	.24	.01	.01	-.15	.33	.27	.15	.36

N = 316 累積寄与率 = 39.4 %

Table 2. 子どもの気になる行動の各因子間の相関と平均値、SD、 α 係数

	I	II	III	IV	V	平均	SD	α 係数
因子I コミュニケーションの困難さ	-	.18**	-.02	.04	.11*	.31	.26	.75
因子II 集団適応と 情動抑制の困難さ	*	-	.05	.11*	.17**	.34	.24	.75
因子III 対人不安と 感情表出の困難さ			-	-.38**	.05	.37	.28	.61
因子IV 消極性				-	.05	.09	.18	.45
因子V 日常活動の困難さ					-	.11	.20	.57

**：相関係数は1%水準で有意（両側）

*：相関係数は5%水準で有意（両側）

4. 保育者・保護者間の差の検討（Table 3）

保育者・保護者間の差の検討を行うために、子どもの気になる行動の各下位尺度得点についてt検定を行った。その結果、「コミュニケーションの困難さ」（ $t=-10.06$, $df=314$, $p<.001$ ）, 「消極性」（ $t=-2.28$, $df=314$, $p<.05$ ）, 「日常活動の困難さ」（ $t=-2.27$, $df=314$, $p<.05$ ）について、保護者よりも保育者の方が有意に高い得点を示していた。一方で、「対人不安と感情表出の困難さ」（ $t=4.62$, $df=314$, $p<.001$ ）では、保育者よりも保護者の方が有意に高い得点を示していた。また、「集団適応と情動抑制の困難さ」（ $t=-1.67$, $df=314$, $n.s.$ ）では、保育者、保護者の得点に有意な差は見られなかった。

Table 3. 保育者・保護者別の平均値とSDおよびt検定の結果

	保育者 (N=144)		保護者 (N=172)		t値
	平均値	SD	平均値	SD	
因子I コミュニケーションの困難さ	.45	.27	.19	.20	-10.06***
因子II 集団適応と情動抑制の困難さ	.36	.23	.31	.24	-1.67
因子III 対人不安と感情表出の困難さ	.30	.24	.44	.29	4.62***
因子IV 消極性	.12	.18	.07	.17	-2.28*
因子V 日常活動の困難さ	.13	.22	.08	.18	-2.27*

* $p < .05$, *** $p < .001$

5. 因子ごとの保護者自身の子どもの気になる行動について (Table 4)

保護者自身の子どもの気になる行動アンケートを、保育者・保護者の子どもの気になる行動の因子ごとの平均値と標準偏差を算出した。「コミュニケーションの困難さ」(平均 .03, SD .07), 「集団適応と情動抑制の困難さ」(平均 .08, SD .14), 「対人不安と感情表出の困難さ」(平均 .09, SD .15), 「消極性」(平均 .19, SD .23), 「日常活動の困難さ」(平均 .03, SD .09) であり, 「消極性」に関する子どもの気になる行動が最も多い結果となった。

Table 4. 保護者自身の子どもの気になる行動の下位尺度得点

	平均値	標準偏差
因子Ⅰ コミュニケーションの困難さ	.03	.07
因子Ⅱ 集団適応と情動抑制の困難さ	.08	.14
因子Ⅲ 対人不安と感情表出の困難さ	.09	.15
因子Ⅳ 消極性	.19	.23
因子Ⅴ 日常活動の困難さ	.03	.09

N=172

6. 保護者の子育てに関する悩みと楽しさにおける自由記述の分析

最後に、保護者が自由に記述した子育ての悩みや楽しさについて、KJ法を用いて分類した結果を示す。なお、分類の際には、回答のはじめに書かれている記載内容を採用した。また、分類した内容は、大カテゴリーに分けた (Table5, Table6)。

Table 5 子育ての悩みについての自由回答 KJ法結果

親						子ども								環境		
感情的になつてしまふこと	親としての対応	親の人間関係	子どもが理解できない	親の性格	親自身の忙しさ	生活習慣	消極性	反抗的行動	子どもの人間関係	将来への不安	健康への不安	第1子・1人っ子ならではの不安	兄弟関係	母に対するサポート不足	金銭面	
13人	20人	4人	2人	4人	4人	16人	10人	8人	7人	9人	7人	4人	7人	3人	2人	

Table 6 子育ての楽しさについての自由回答 KJ法結果

親				子ども				相互交流		環境
自分自身の成長	自分の存在意義	子育てを通じての交流・イベント	育児自体	成長	行動	表情としぐさ	子どもの存在自体	子どもとの遊び	遊び以外	兄弟関係
8人	10人	7人	5人	60人	12人	19人	7人	7人	6人	3人

保護者の子育ての悩みは、「親」、「子ども」、「環境」という3つの大カテゴリーに分類することができた。また、保護者の子育ての楽しさは、「親」、「子ども」、「相互交流」、「環境」という4つの大カテゴリーに分類することができた。

V. 考察

1 子どもの気になる行動リストの特徴と今後の課題

今までの気になる子どもの行動に関する研究は、いずれも保育者のみを対象としており、保護者の視点に立って気になる行動をとらえた研究は過去にもあまり例を見ない。本研究における保護者、特に母親の立場から見た子どもの行動を捉え調査した本研究の意義は大きいと言える。

調査結果として「コミュニケーションの困難さ」因子や「集団適応と情動抑制の困難さ」因子のような発達障害の可能性も否めない行動のほかに、「対人不安と感情表出の困難さ」のような、先述した「対人関係面の不安」や「不適切な感情表出」のタイプの因子が抽出された。一方で、「消極性」「日常活動の困難さ」因子も抽出されたが、保育者・保護者共に気になるとした回答数が他の3つの因子と比べると少なく、子どもの気になる行動とは捉えにくいという結果が示された。これらの結果は、保育者・保護者は、“おもらしをする”、“着替えができない”といった「日常活動の困難さ」は、集団生活の中での困り事として認識されることもあるが、日々の生活の中で対処できることとして捉え、将来軽減するという見通しを持っているのではないかと考えられた。さらに“心配性である”“親と別になると気が動転する”といった「消極性」は、園生活への慣れ等でも改善可能であり、複数年園生活を経験している年中児、年長児の大半においては、親との別離や新奇場面に不安を感じている園児は少ないと考えられた。しかし、「消極性」「日常活動の困難さ」因子共に、回答数は少ないものの「気になる」と回答した保育者は保護者よりも有意に多いという結果になった。気になる行動を考える際の回答は各保育者によって大きく違い、回答の分布は分散傾向にあったことから、多くの幼児を見なければならぬ困難から、保育者の中には「消極性」「日常活動の困難さ」の対応に困難を感じている保育者も存在する可能性があると言える。今後保育者に対するサポートの必要性についても検討すべきだろう。

今回作成した気になる行動の因子構造と、本郷（2005）の「気になる子どもの行動チェックリスト」とを比較すると、集団への適応の問題や情動抑制の困難さゆえのトラブルの多さ等の観点から見ても、似た因子構造になったと言える。しかし、乱暴的な行動によるトラブルや衝動的な行動によって集団への適応が困難になっている行動の項目が多い本郷（2005）のチェックリストは、器質的な行動の問題を捉えることが中心である。一方で、本研究で作成された尺度は、器質的な行動の問題のみならず、子どもを取り巻く環境によって獲得してきたことの違いによって外在化されている「不適切な感情表出」「対人関係面での不安」のような行動の項目が導入された。今回、この「不適切な感情表出」「対人関係面での不安」のような行動が、保育者、保護者ともに「気になる」とする回答が得られたということは、現在の子どもの気に

なる行動を調査するためには、必要な項目だろうと考えられる。

矢嶋ら(2000)の「幼児の問題行動に関する因子構造モデル」では「無気力」を取り上げていたが、今回の結果では、保護者自身の子どもに対する気になる行動として、「消極性」因子を挙げる回答が多かった。さらに保護者による悩みに関する自由回答でも「消極性」を挙げる保護者が10人と比較的多かった。このように、自身の子どもについては、「無気力」や「消極性」のような自発性のなさが、「気になる」と考える保護者が多い可能性が考えられる。今後、「無気力」や「消極性」として表わされる行動を、集団の中で主張できないような行動として増やす等、項目を吟味し、気になる行動の検証を行うことが喫緊の課題であると言えよう。さらに今後は、このような消極的な子どもたちが将来どのように成長していくか、という研究が必要になるだろう。

また今回の因子分析の結果では、「対人不安と感情表出の困難さ」因子、「消極性」因子、「日常活動の困難さ」因子の信頼性が低く、累積寄与率が低かったことが挙げられる。これは、子どもの気になる行動の調査が「気になる」「気にならないか」の2件法であったことが関連していることも考えられるので、今後は、4件法等の調査法の検討が必要であると言える。また、調査項目についても再検討する必要があるかもしれない。

2 保育者にとっての「気になる行動」の特徴

保育者・保護者共に「コミュニケーションの困難さ」因子、「集団適応と情動抑制の困難さ」因子、「対人不安と感情表出の困難さ」因子の行動が「気になる」としつつも、その回答頻度には保育者と保護者で違いが見られた。Table3の結果では、「コミュニケーションの困難さ」の因子に見られる行動に「気になる」と回答した保育者は保護者よりも有意に多く、反対に「対人不安と感情表出の困難さ」の因子に見られる行動には保護者が有意に多く回答した。一方で「集団適応と情動抑制の困難さ」に関しては有意差は見られず、保育者・保護者共に比較的多く回答していることが分かった。さらに、回答の平均得点を見ると、保育者は「コミュニケーションの困難さ」因子の行動が最も多く「気になる」と回答し、次いで「集団適応と情動抑制の困難さ」因子、「対人不安と感情表出の困難さ」因子という順に「気になる」とした。一方で、保護者は「対人不安と感情表出の困難さ」因子の行動が最も多く「気になる」と回答し、次いで「集団適応と情動抑制の困難さ」因子、「コミュニケーションの困難さ」因子の順に「気になる」としている。

今まで、保育者の研究や研修会等で多く見られたこととして、子どもの「気になる行動」を理解しようとするときは、発達障害が疑われるような行動、もしくは、いわゆるグレーゾーンと呼ばれる行動が挙げられ対応策が提示されてきた。今回の結果からも、保育者にとっては、保育の現場では「気になる行動」を発達障害が疑われる行動、もしくはグレーゾーンと呼ばれる行動として捉えることが通例となっていることが窺えた。

保育者は、子どもの発達に関する知識を持ち、子どもと適度に距離を保ちつつ、子どもの育ちを集団の中の個人として捉えていることがわかる。そのため、今回の質問に対しても、「語彙が少ない、一語文でしか話さない」「促されてもあそびをやめられない(あそびを終えなけ

ればいけないとき等)」など、専門的な視点から、発達に問題があると思われる行動や集団の中で目を引く行動をとる子どもの行動に多く○がついている。反面、「『バカヤロー』など人が傷つく言葉を言う」、「さびしそうにしていることが多い」等の情緒的な行動については、上位には及ばなかった。これは、保育者は、保育の意図や子どもの行動の背景を見て、その対応を考えるという役割の中では、対応可能であり、「気になる行動」ではあるが、深刻な困り事としては認識されないということなのだろう。

3 保護者にとって「気になる行動」の特徴

1) 子どもとの一体化や子どもの行動に対する責任感の影響

保護者は、「対人不安と感情表出の困難さ」因子に含まれている「『バカヤロー』など人が傷つく言葉を言う」、「さびしそうにしている」等の情緒的な問題や、他者に迷惑をかける行為、すなわち集団の中で孤立してしまいかねない行動に対して、気になるとする保護者が多いことが示された。今回回答した保護者は、母親が98.3%と大半を占めているので現代の母親の子どもに対する心性の従来の研究に沿って考察したい。

大日向（1988）の母親感情の研究結果によれば、母親にとっては、特に子どもに対して「私がおの人のためならできるだけのことをしてあげたいと思う」人は全体の78.3%を占め、子どもへの献身的な愛情を持つ親が多いことがわかった。さらに、献身的な愛情を持つ母親は、同時に子どもに密着するという傾向が示されている。この結果は、保護者の子どもに対する献身的な愛情は、子どもの痛みを自分のことのように受け止めるという子どもへの一体感につながっていると考えられる。すなわち、我が子の、「さみしそうにしている」などの情緒的な問題に対しては、自分のことのように痛みを感じ、集団から孤立してしまう、というような子どもの困り事は、自分の痛みとして返ってきてしまうのではないだろうか。そして、自分がわが子への愛情を与える役割を持っている母親にとっては、自分の愛情が足りなかったのではないかと、罪悪感すら感じてしまう。そのため、「『バカヤロー』など人が傷つく言葉を言う」、「さびしそうにしている」等の集団の中で孤立してしまいかねない問題に対しては、非常に敏感に反応している可能性が考えられた。

また、女性は、母親になると、子ども同士の関係と母親同士の関係という2重の関係性を初めて体験することになり、子ども同士の関係性に対してまでも、自分が責任を負わなければならないと考える。このような責任感の下では、子どもが他者に迷惑をかける行為や集団の中で孤立しかねない行為は、母親同士の関係性に影響し母親自身も孤立しかねない行動と考えるのではないだろうか。

2) アドバイザーの不在と保護者の孤立、子育てのマニュアル化

汐見（2004）は「今の親は生きたマニュアルがなくて困っている」と述べているように、核家族化が進む中で、身近にモデルとなる人やアドバイザーの存在もなく、「孤立した養育環境のなかで、子育てに全責任を担っていかなければならない—こんな条件のなかで、育児に対する自信のなさや、強い不安を感じながら乳幼児を育てる母親も少なくない」（濱口、2003）。こうした保護者は育児雑誌に頼らざるを得ず、マニュアル化した育児になる傾向がある。また、

「価値観の多様化が進む社会の中で、個は大事だと頭では理解していても、親はまだまだ“みんなと同じ”であることで安心感を得ている」とする汐見(2004)の言葉にもあるように、年中児、年長児の子どもは就学前のこの時期、周囲の友達と仲良く遊ばなければいけない、というような“みんなと同じ”育ちを期待している。そうした状況では就学を控えたわが子が友達と仲良くできるか、孤立しないか、いじめられないか、等といった集団に適應できるかどうかという心配は非常に強いものなのだろう。このような保護者にとって、自分の子育てと一緒に考えてくれ、またより良い方向へ導いてくれるようなアドバイザーの存在は欠かせないと考える。木山ら(2002)が「保育の現場には子どもへの保育活動にとどまらず、広く保護者の啓蒙を意図した積極的なかわりが望まれる」と述べているように、日常的に子どもと接している保育者が、その役割を担っていかなければならないと思われる。

3) 保護者の考える一般的な「気になる行動」とわが子の「気になる行動」の相違

保護者の一般的な子どもの気になる行動としての「消極性」「日常活動の困難さ」因子の回答は少ないものの、自身の子どもに関する悩みの中ではこの2つの因子に関する自由記述が多いという結果となった。保護者は、一般に“心配性である”“親と別になると気が動転する”といった消極性や、“おもらしをする”、“着替えができない”といった「日常活動の困難さ」は、加齢によって成長が見込めるものであり子どもの個性として受け止めるべき、と頭では思っているが、一転して我が子に関しては、周りの子と違う、あるいは遅れていると感じる行動は、受け入れ難い行動として捉えているのだろう。我が子の将来に全責任を負っている母親にとっては、このような行動を「個性」として悠長に構えている場合ではなく、何とかしなければいけない、将来どうになってしまうのだろう、という不安や焦りが悩みに直結していることは容易に想像がつくことである。

以上、保育者と保護者は、同じ行動に着目していても、捉え方やその行動に対する感じ方は、それぞれ違うものであることが示された。専門的な知識を持ち、距離を保ちながら子どもの行動を捉える保育者が、子どもと一体化し自分の悩みとして子どもの行動に敏感に反応している保護者の心情を思いやることができなければ、この認識の違いは大きな隔たりになりかねない。就学を控えた子どもたちが、将来集団に適應できるかどうか、という保護者の心配に対して、保育者は専門的な立場から、今後の見通しを説明する等、子ども一人一人のニーズに沿った教育が受けられるように、保護者、さらには小学校との連携を進めていくことが望ましいと考える。今回の結果で、保護者は「対人不安と感情表出の困難さ」因子に関する行動を保育者より有意に気になるとしたことや、保護者の悩みの自由記述では「親としての対応」に関することが最も多い悩みとなっていたこと等からも分かるように、保護者は自分の対応が、子どもの対人関係や生きる力に将来悪影響を及ぼしてしまうのではないかと不安を抱えていることが推察される。保育者は保護者に対して、特にこうした子育ての方法や、月齢に沿った対応の仕方、より良い接し方等に関するアドバイスを、必要な時に必要なだけ提供できる場を設けることは、非常に有効な支援となるだろうと考える。

なお、本研究における保護者への調査は、1つの幼稚園に在園する子どもの保護者のみを対象としたものであるために、この結果を敷衍するためには他の地域、他の幼稚園・保育園でも調査を行い、結果を確認する必要があると思われる。

最後に

今回の調査において、保育者・保護者にとっての気になる行動について調査を行ってきた。

これまで子どもの「気になる」行動とは、発達障害を持つ、あるいはグレーゾーンと言われるような行動として捉えられていたような通例があったが、今回の調査ではその他の「不適切な感情表出」や「対人面での不安」について「気になる」とする保育者・保護者も多いことが分かった。一方で、保護者に対する子育ての楽しさに関する自由回答を見ると、子どもの成長に対する喜びや、ただ存在してくれることの幸せ、頼られることの責任感、子どもを通して得られた保護者自身の成長という点が多く記載され、子どもに対する気になる行動はあっても、ほとんどの保護者は全体的に“楽しい”と回答されていた。子どもに対する愛おしさ、責任感、子どもを通しての自分自身の成長等、保育者、保護者共に存分に実感していることなのだろう。愛おしい子どもより良い成長のため、という目標は保育者・保護者共に同じなのである。保育者・保護者は、共通の目標に向かう同志として、共に信頼し合い、助けを求め合いながら、奮闘していきたい。今回の調査で明らかになった保育者と保護者の認識の差異が、保育者・保護者がお互いを理解し、共に信頼関係を築きながら協働するための助けとなることを願っている。

引用文献

- 藤井千愛・小林真（2010）.保育者による「気になる子ども」の評価 —「気になる子ども」と発達障害との関連性— .とやま発達福祉学年報, 1, 41-48.
- 平澤紀子・藤原義博・山根正夫（2005）.保育所・園における「気になる・困っている行動」を示す子どもに関する調査研究—障害群からみた該当児の実態と保育者の対応および受けている支援から— .発達障害研究, 26, 256-267.
- 本郷一夫・澤江幸則・鈴木智子・小泉嘉子・飯島典子（2003）.保育所における「気になる」子どもの行動特徴と保育者の対応に関する調査研究.発達障害研究, 25, 1, 50-61.
- 本郷一夫（2005）.「気になる」幼児とは.言語, 34, 9, 42-49.
- 本郷一夫（2006）.保育の場における気になる子どもの理解と対応 特別支援教育への接続.ブレーン出版.
- 本郷一夫（2007）.保育の場における「気になる」子どもの理解と対応に関するコンサルテーションの効果.LD研究, 16, 3, 254-264.
- 木下孝司（2010）.ゆったりじっくり歩む道のり—自分づくりの発達論（最終回）夢中になることで生まれるもの, みんなのねがい, 518, 12-16.
- 厚生労働省（2008）.厚生労働省の障害児支援の見直しに関する検討会報告書 厚生労働省の障害児支援の見直しに関する検討会.
- 文部科学省,（2006）.子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について（答申）—子どもの最善の利益のために幼児教育を考える—, 中央教育審議会.
- 文部科学省（2009）.特別支援教育の更なる充実に向けて～早期からの教育支援の在り方について～.特

別支援教育の推進に関する調査研究協力者会議.

- 中田洋二郎・上林靖子・福井知美・藤井浩子・北道子・岡田愛香・森岡由起子 (1999). 幼児の行動チェックリスト (CBCL/2-3) の日本語版作成に関する研究. 小児の精神と神経, **39**, 4, 305-316.
- 大隅靖子 (1989). 第 5 章 知能の発達 山内光哉 (編), 発達心理学 上. ナカニシヤ出版, pp56-62.
- 汐見稔幸 (2004). インタビュー子育て不安, 育児ストレスを抱える親をどう受け止める? どう支える?. 保育の友, 全国社会福祉協議会.
- 首藤敏元 (1995). 幼児の自己主張-自己抑制に関する質問紙, 心理測定尺度集Ⅳ~子どもの発達を支える <対人関係・適応>~.
- 矢嶋裕樹・齋藤友介・中嶋和夫 (2000). 幼児の問題行動に関する因子構造モデルの検討. 東京保健科学学会誌, **3**, 3, 166-172.